

リゼットの肉体で生き返ってしまった少年の話

もちよ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの惨劇から数か月。グランサイファーに乗ることになったミレイユとリゼットは、あの町で起こった惨劇を償うための贖罪の旅をしていた。そんなある日二人はカリオストロの部屋に突然呼び出される。そこには神妙な面持ちをしたカリオストロの姿が。

するとカリオストロの口から、驚きべきことが伝えられた。

「もしかしたら、あの町で死んだ人間を一人蘇らせることが出来るかもしれない。」

これはあの惨劇より一人生き返り、リゼットの体で生きることになった少年の物語。

プロローグ 最期に見た記憶

目次

プロローグ 最期に見た記憶

その「何か」は、小さな子どもの僕の体を一瞬で覆いこんだ。これが僕が「この体」で見た最期に見た光景だ。

一瞬のことですその時の僕は自分が何をされたのか全く分からなかったが、

一体何があの日の夜起こっていたかは分かる。

あの日の夜、何やら外で騒ぎがすると思い、僕の両親は飛び起きた。起きるや否や、なにやら外から悲鳴や叫び声が聞こえてくる。

その声を聴き、すぐさま異常事態だと気付いた両親は、僕を連れ家から逃げ出した。

家の扉を開けると、そこは地獄絵図だった。

首のない死体。胴体の欠けた死体。縦に真っ二つになっている死体。それが至る所に転がっていたのだ。

昨日まで普通に話していた近所のおじさんが、

お父さんとお母さんの足元で物言わぬ死体になって転がっている。よく見ると、おじさんは下半身から下が無くなっていて。

目も背けたくなるような光景が僕らの視界に無理やり入ってくる。

「ああ…なんで…どうして…うぷっ」

僕のお母さんが、近所のおじさんの死体を見て吐きそうになっている。

その時の僕は、思わず目をそらしてしまっていた。

おじさんの死を、受け入れたくなかったからだ。

「見るな母さん!!…今は、今は俺達だけでも逃げることだけを考えよう…!!」

お父さんは僕を抱きかかえて、お母さんと一緒に走り出す。

お父さんは、ここから一番近い西の関所の方まで走っていかこうとしていた。

「関所なら武器がある、そこで護身用の武器を取って外に逃げよう」
僕らは逃げた。ひたすら逃げた。

お母さんが、僕を守る為にとつさに僕を投げ捨てる。

「…逃げろ——!!!お前だけでも逃げてくれ!!!」

「——ちゃん!!早く!!!」

そして、僕の両親はその『何か』に食われて死んだ。

「逃げろ」

確かにそう言われた。お父さんとお母さんの最期の言葉。

そして僕は、関所に向かって一目散に走り出した。

しかし僕の子どもの足の速さがその「何か」から逃げられるはずもなく

「何か」は僕の方へ一瞬で追いついた。

そして「何か」は、お父さんとお母さんのように僕の体を飲み込んだ。

僕は必死でもがいた。しかしもがけばもがくほど、僕の体は「何か」に飲み込まれていく。

飲み込まれるまでの一瞬、僕はその「何か」と目が合った。

「何か」を覆っていた瘴気や黒い靄が晴れる。そして、僕はその何かの顔を間近で見ってしまった。

「えっ…」

僕はその「何か」の正体が分かる。分かってしまったんだ。

だって、あの「何か」、あれの正体は…

り、リゼ…ツト…おねえちゃ…なん…で?